

学生向けランチョンセミナー 「ビジネスガイダンス」報告

産官学協力委員会 株式会社 NJS 馬場 啓輔

1. 企画の趣旨と経緯

本セミナーは、平成19年度の第42回年会から開始し、今年で11年目となる企画であり、「水環境ビジネスガイダンス～水環境の仕事に携わりたい学生の皆さんへ～」をテーマとして開催している。企画の趣旨は、学生の皆様が水環境関連の仕事に興味を持つきっかけとなるよう、同分野に関連する民間企業や自治体の事業概要や業務内容等の紹介を通じて、業界の魅力や業種の多様さ等を知っていただくことである。したがって、個別企業の宣伝ではなく、就職活動では十分に得ることのできない貴重な情報（仕事の楽しさ、魅力、やりがいや苦勞、学生時代の専攻と業務の関係など）を第一線で活躍されている技術者の方々から直接聞く機会を設けることに主眼を置いている。

2. セミナーの実施状況

セミナーは、年会2日目（3月16日）の昼休みの時間を利用して行われ、6名の講演者から水環境関連の仕事の内容紹介やエピソードなどについて発表いただいた後、会場からの質疑を含め1時間にわたり行われた（写真1）。その後も講演者の方々には、会場に残っていただき、学生からの個別の質疑応答に、丁寧に対応していただいた。本企画が年会イベントとして定着してきたことや、関係者の皆様のご尽力もあり、60名を超える参加者が集まった（写真2）。セミナーは盛況であったが、近年の100名を超える参加者の状況と比較するとやや寂しい結果であった。

会場となった北海道大学周辺には魅力的な飲食店が多く、昼食時間を利用した本セミナーにも少なからず影響があったものと想像する。学生への周知方法も含め、次年度での検討課題としたい。

3. 発表者およびその発表概要について

(1) いであ株式会社 澤井淳氏

澤井氏は、環境コンサルタントの技術者として活躍されており、行政、コンサルタント、施工業者等との関係性や環境コンサルタントの役割等について分かりやすく説明された。コンサルタントとして社会基盤の整備に携わり、その中でご自身の専門性が活かされていること、また、新しいチャレンジによってその専門性が広げられ

ること等が日々のやりがいとなっていると話された。一方で、限られた時間、予算で発注者が求める内容に臨機応変に対応していくことが大変だと感じることもあるが、学生時代に身に付けた考え方、基本スキル、業務に対する前向きな姿勢があれば活躍できると力強いメッセージで発表を括られた。

(2) 札幌市水道局 大川久美子氏

大川氏は、水道局給水部水質管理センターに所属されており、水道水源の監視や浄水工程の水質検査等の「水質管理の仕事」について説明された。現在の仕事は200万人の生活、健康に直結しているという責任を感じながら従事されているとの発言が印象的であった。また、民間の環境コンサルタントで環境計量の業務に従事していたことや、その後の転職や職場異動等にも触れながら、様々な環境分野の経験について話された。転職後に「役所の仕事はやりがいがあるのか」等の質問を受けたエピソードを紹介され、民間企業とは公共に対する役割こそ違うが、自身の仕事で街が変化していく様子を実感できることがやりがいにつながっていることを強調された。最後に、大学で学んだことが、すぐには業務に直結しないことや、知識として不十分だとしても、新しい知識を吸収するためのきっかけとなること、思いがけない場面で活用できることもあるとして、「分野外だから活躍できない」ではなく「人と違う引き出しを持っている」との考え方が大切だと話された。

(3) 札幌市下水道河川局 工藤亮太氏

工藤氏は、事業推進部処理施設課に所属され、下水汚泥の有効利用・汚泥処理の維持管理等の業務に従事されており、下水汚泥の発生から焼却、有効利用までの流れを分かりやすい図を示しながら説明された。配属先については、学生時代の専攻とも異なり、全く想像しておらず大きな戸惑いがあったことを話された。しかし、仕事を通じて様々な人との出会いや経験を重ねていくうちに、下水道分野の奥の深さを感じ、札幌市の未来に貢献できる現在の職場に非常に満足していると話された。また、学生時代は農学部であったため、これまでの知識は活用できないと思っていたが、微生物やバイオガス等、意外に共通する部分が多くあり、現在の仕事の基礎知識となっていること、さらに、知識だけでなく学生時代に身に



写真1 質疑応答風景



写真2 セミナー会場の様子

付けた論理的な思考や表現方法が仕事を円滑に進めるうえで役に立っているとされ、希望と異なる仕事内容であったとしても、前向きに取り組むことでやりがいが生まれると話された。

(4) 三機工業株式会社 半田大介氏

半田氏は、環境システム事業部に所属され、プラントメーカーとしての立場から、環境関連事業の領域、発注の仕組み、技術内容等について幅広く紹介された。ご自身の経歴として、学生時代の研究内容や就職後の所属先での業務内容について触れられ、自社開発の設備が顧客に喜んでいただけたこと、様々な新技術に触れることが大きな刺激となったこと等をやりがいとして挙げられた。学生時代から環境分野に携わっており、大学で身に付けたこととして、専門知識以外にも水環境分野への意識や気持ち、研究姿勢、人とのつながり等を挙げられた。最後に、水環境の仕事に従事するにあたって、自然や社会を守っているという気持ちを忘れないことが大事であるとして発表を括られた。

(5) セントラル科学株式会社 竹内達也氏

竹内氏は、営業部に所属されており、水質測定機器メーカーの観点から、水環境分野における水質測定機器の活用シーン、今後期待される役割等について幅広く説明された。営業職であるが技術部門等との連携は必須であり、また、顧客との窓口として必要な専門知識の習得にも努められていること、様々な技術研修に参加されていること等を紹介された。仕事のやりがいとしては、顧客からの信頼、海外での業務等を挙げられ、一方で、文系出身のため当初は専門用語の理解に苦労したこと等を話された。今後はさらなる海外展開への挑戦を目標とされ、学生へ「伝えたいこと」としても語学の習得が重要だと話された。

(6) 大成建設株式会社 山本哲史氏

山本氏は、建設会社の研究開発部門に所属されており、一般的に水環境との関連を想像しにくい「ゼネコン」という立場から、水環境分野への関わり方や活用技術の種類等について丁寧に説明された。学生時代は農学と工学を専攻され、身に付けられた化学や生物、分析手法等の専門知識や工学的視点からのアプローチ方法が現在の仕事に活かされていること、人とのつながりが仕事をするうえで大きな力になったと話された。社会人として大切なこととしては、相手に理解してもらおう「伝える力」、専門分野にこだわらず知識を広げる「探究心」をまず挙げられ、さらに、10年後の自分をイメージすること、時には一休みすることの重要性を話された。

4. アンケート集計結果

セミナーに参加した学生の満足度と意見を把握し、今後の企画をより一層学生にとって有意義なものとするために、アンケート調査を実施した。回答者数は62名であり着席した学生のほぼ全員から回収できた。集計結果は以下のとおりである。

- 参加した学生の内訳は、大学院前期課程76%、学部生16%、大学院後期課程3%、高専学生3%、大学教員2%であった。
- 参加の動機は、60%の学生が水環境関連の仕事に興味があり、就職活動の参考にしたい、19%は就職とは無関係に、水環境関係への仕事への理解や知識を深めた

いからと回答している。10%の学生はランチが提供されるからと回答していた。

- 目指す業種については、水環境関係のコンサルタントが29%と最も多く、水環境関係プラントエンジニアリングが24%、大学、公的研究機関の研究機関11%と続き、以下、水環境関係の装置・分析機器製造業9%、公務員7%、水環境関係の土木建設業6%、化学工業・石油・石炭・プラスチック製品製造業5%となった。
- 興味がある部門については、研究開発部門が43%と最も多く、技術・設計部門が42%、以下、営業部門6%、建設・工事部門5%、総務企画部門1%となった。
- 本セミナーについて、参考になったと回答した学生が84%、期待したほどではないと回答した学生が16%であり、参考にならなかったとの回答はなかった。
- 次回ビジネスガイダンスで登壇者から聞きたい内容としては、今回同様、水環境に係る一般的な仕事の内容・仕事の楽しさ等が55%と最も多く、日本水環境学会会員団体（企業や公共機関）の採用情報が25%、日本水環境学会会員団体（企業や公共機関）の特徴的技術や商品の情報が17%であった。
- ビジネスガイダンス以外で日本水環境学会から提供してほしい情報としては、水環境に係る一般的な仕事の内容・楽しさ等と日本水環境学会会員団体（企業や公共機関）の採用情報が33%で並び、日本水環境学会会員団体（企業や公共機関）の特徴的技術や商品の情報が29%であった。
- 上記情報の提供を受けたい機会、媒体については、年会もしくはシンポジウムの昼食時（ビジネスガイダンスとは別日）が44%、日本水環境学会HPが33%、日本水環境学会誌特集記事が23%であった。
- 自由回答として、参考になったこと、不満であったこと、その他自由に意見や要望について記入していただいた。これらの要望への対応や改善案については、今後産官学協力委員会で検討していきたいと考える。

5. 総括

セミナー会場での質疑やアンケートの回答内容から、本企画が年会の1行事として定着し、学生にとって有益な場として好意的に受け止められているものと感じられた。

就職活動を控えた学生は、これまで学んだ専門性が社会で通用するのにかに悩み、将来を選択するというイベントに戸惑い、さらに就職後のワークライフバランスにも不安を抱えている。今回の発表で共通していたことは、水環境分野の仕事は様々な分野と関連しており、身に付けた専門知識が必ず活かせる場面が来ること、就職後も様々な選択肢があること、やりがいは自分で発見し育てるものであること等であった。第一線で活躍する技術者の生の声には、現実の厳しさがメッセージとして込められており、学生は社会に採られた数年後の自分の姿を想像できたのではないかと期待している。

次年度以降も、より多くの学生にとって有意義な時間となるよう、本企画を充実させていければと考えている。

最後に、年度末の多忙な時期にも関わらず発表してくださった講演者の皆様、本企画にご賛同いただいた所属企業、所属機関の皆様に、この場を借りて厚く感謝を申しあげたい。